

ウテメリン服用患者への副作用『頻度・重症度一覧表』の作成と有用性の検証

(大阪府) 総合メディカル株式会社 そうごう薬局 三国ヶ丘店

○福田 祥子、今井 英詞

【目的】

切迫流産や早産の治療薬であるウテメリンは、副作用として動悸・しびれ・嘔気等が知られているが、これらの症状は重篤化することがほとんどなく、治療が優先されるため、副作用が現れても服用を継続するよう指導するのが一般的である。一方、横紋筋融解症や汎血球減少症など重篤な副作用も報告されており、副作用の症状・程度によって服用継続もしくは中止の判断を行う必要があるが、対応する薬剤師の知識や経験により、その判断にばらつきが生じている現状がある。そこで、起こりうる副作用の全体像や臨床経過・症状・重症度などを一覧表にし、薬学的判断根拠を明確にすることによって、副作用発見と服用継続の判断を確実に行えるのではないかと考えた。今回そのツールとして『頻度・重症度一覧表』作成し、その有用性を検討したので報告する。

【方法】

- (1) ウテメリンの軽度な副作用と重篤な副作用の症状を、頻度と重症度から一覧表にする。
- (2) 『頻度・重症度一覧表』をもとに患者へ聞き取り及び指導を実施する。

【結果】

ウテメリンが2回以上処方されている78名の患者に、『頻度・重症度一覧表』にもとづき①動悸・しびれ・嘔気の有無②筋肉痛の有無（横紋筋融解症初期症状）について聞き取りを行い、それに応じた薬学的判断と患者ケアを実施したところ、動悸23名(29.6%)、しびれ7名(8.9%)、嘔気3名(3.8%)の副作用症状が得られたが、筋肉痛の発症は見られなかった。結果的に、42.3%の患者に副作用症状が発生したが、服用中止の必要があるものはなかった。またその後の経過が重篤化することもなかった。

【結論】

『頻度・重症度一覧表』を活用することで、患者の約半数に副作用症状が発生していることがわかった。さらに、服用継続・中止の判断をおこなうことによって、不必要な服用中断を回避することができた。また、副作用の全体像が把握できるようになったことで優先的に確認すべき副作用症状が明確になり、確認できているもの、できていないものの把握が容易になった。以上のことから『頻度・重症度一覧表』の活用は、薬学的判断基準を明確化し、重篤な副作用の発生を未然に防ぐ手法として有用であることが示唆される。